

老乞大札記

中村雅之

1. 「乞大」は「Kitai」か？

『老乞大』という書名に含まれる「乞大」が北方中国（の民）を意味するモンゴル語に由来するものであることは、これまで多くの研究者が言及してきたし、その見解は基本的には正しいと思われる。しかし、「乞大」がどのモンゴル語に対応するのかという点に関しては十分に明確ではない。

金文京等訳注『老乞大』（平凡社2002年）の「はじめに」では、「乞大」は「Kitai」もしくは「Kitat」を漢字で音訳したもので、「契丹人」のことであるとし、さらに、「契丹Kitanは複数形、Kitai、Kitatはその単数形である」と述べている。この記述の基づく所は明らかではないが、納得しかねる点がいくつかある。まず、単数形と複数形についてである。元代のモンゴル語において「-t」は最も一般的な複数形の接辞であるが、なぜ「Kitan」を複数形として「Kitat」を単数形と見なしうるのかが疑問である。次に、「乞大」が「契丹人」のことだと述べている点である。これは恐らく、「Kitai」ないし「Kitat」の語がもともとは「契丹人」を指したというつもりなのであろうが、「契丹人」を「Kitai」や「Kitat」と表記したモンゴル語文献が存在するという話は寡聞にして知らない。最後に、「乞大」の語が「Kitai」と「Kitat」のいずれにあたるのかという問題がある。以下には、専ら最後の問題について考えてみたい。

「乞大」に対してしばしば「キタイ」という読みが与えられることがあるのは、いかなる事情によるのであろうか。遼朝を建てた契丹人がしばしば「キタイ人」と呼ばれることから、「乞大」を「契丹」と同一視したものであろうか。あるいはロシア語などで中国を意味する語「Китай (Kitai)」と関連させてのことであろうか。ロシア語における呼称はモンゴル語からの借用であるという説もあるようであるが、チュルク語やペルシヤ語などイスラム圏を経由したものである可能性も否定できない。『東方見聞録』において北方中国を指す「カタイ」にしても同様である。

「契丹」を「キタイ」と称することがあるのは、おそらく契丹人の一派の建てた西遼がイスラム資料で「カラ・キタイ」と呼ばれることに端を発する。「カラ・キタイ」が「黒い(?)契丹」の意であるとするれば、「契丹」は「キタイ」と呼ばれたはずだということであろう。やや強引な三段論法のようにも思われるが、それが契丹にのみ適用されるのであれば大きな支障はない。

「契丹」と「乞大」とは、語源を遡れば関連する可能性はあるとはいえ、その意味するところは大いに異なる。「契丹」はいずれの文献においても遼朝を建てた一族のみを指すが、「乞大」はその「契丹」の意味には用いられていない。高麗の漢語教科書たる『老乞大』において、その書名に「契丹」を意味する語を冠する理由があろうか。

私見によれば、「乞大」はモンゴル語「Kitad (=Kitat、いま蒙古文語の一般的な転写法による)」の音訳である。「Kitad」は周知のように北方中国の民を意味する語であり、狭義の漢人のほかに契丹人・女真人その他を含む。地理的には概ね金朝の版図に収まり、言語的には漢語を解する人々ということになる。「Kitad」はまたその地域を指す語としても用い

られ、現代モンゴル語で中国を意味する「Хятад」はこの語が音変化を経たものである。

中国を北方と南方とに分かつ例は古くからあったが、モンゴル語におけるその習慣は、直接にはモンゴルが台頭してきた13世紀初頭の状況を反映したものと考えるべきであろう。当時北方には金朝があり、南方には南宋があったため、それぞれの民を異なる語で呼んだのである。金時代の漢語では北方の民を「漢児」「漢人」、南方の民を「蛮子」「南人」と称した。元代の「蒙古訳語」（『事林広記』所収）では、それぞれに対して、以下のようなモンゴル語訳があてられている。

漢児：札忽歹（=Jaqu[d]dai）

蛮子：囊家歹（=Nanggiadai）

『元朝秘史』では金朝の民を「札^ㄷ忽惕（Jaqud/傍訳：金人毎）」と称している。「蒙古訳語」の「札忽歹」はこれに相当すると見られる（「歹」については後述）。金朝が滅んでからもしばらくの間はその遺民を「Jaqud」と呼んでいたことになる。これに対して、明代の資料では北方の民を意味する「Jaqud」が全て「Kitad」に置き換えられている。

漢人：乞塔惕（=Kitad/甲種『華夷訳語』来文。雑字では「乞塔」）

漢人：乞塔惕（=Kitad/乙種『韃靼館訳語』）

漢人：乞塔（=Kita[d]/『登壇必究』巻22）

『老乞大』は元代に作られたものであるから、「乞大」が「Kitad」の音訳であるとすれば、その語の音訳としては最も古い資料ということになる。しかし、「乞大」が「Kitad」の音訳であることに、あるいは疑いを抱く向きもあろう。「乞大」を日本語で読めば「キツダイ」となり、「Kitai」の方が似ているではないかと。この点に関しては、二つの問題を考慮する必要がある。その1は、「大」の発音。その2は、モンゴル語の漢字音訳における2種の表記法である。

まず「大」の発音であるが、中古音では/dai/のような発音であったことが知られており、一方現代では/ta/である。/dai/ > /tai/ > /ta/と変化したと考えられる。では『老乞大』においてはどの段階にあったか。私は現代と同様に/ta/であったと思う。16世紀前半の『翻訳老乞大』のハングル注音では、左側音「dda」、右側音「da」である。また、元代の『中原音韻』においては/tai/、/tuo/、/ta/を表わすと思われる音のグループにそれぞれ「大」が登録されている。したがって、『老乞大』成立当時の「大」を/ta/と考えて矛盾はない。理論的には/tai/を表わしたと見ることも不可能ではないが、その場合、数十年後に成った甲種『華夷訳語』の語彙と音形が異なることになり、問題がより複雑になる。

次の問題は音訳法である。「Kitad」という語を漢字音訳するのに、甲種『華夷訳語』のように「乞塔惕」とすれば、もとのモンゴル語を過不足なく表現できる。これに対して、「乞大」では語末子音「-d」が省略されている上に、「Kida」となり、もとのモンゴル語からは大分かけ離れるような印象を受ける。一般に漢語の無声有気はモンゴル語の無声音に、漢語の無声無気はモンゴル語の有声音に対応するからである。しかし、これは元代の伝統的な表記法と、元末明初の精密な音訳法との違いと見るべきである。

『事林広記』所収「蒙古訳語」や『元史』のモンゴル語語彙などに見られる伝統表記では、「-b」「-d」「-g」「-γ」などの語末子音は一般に表記されない。また、モンゴル語の無声音に対して時に無声無気の漢字があてられることがある。耳で聞いた印象に頼るためであろう。一方、甲種『華夷訳語』や『元朝秘史』の音訳は体系を考慮した非常に精密なものであり、

モンゴル語の音声をほぼ過不足なく表現する。「乞大」は伝統的な音訳法に基づくものと考えられる。『登壇必究』の音訳も、語末子音が記されず、伝統表記の系統に連なる。

以上を勘案すれば、「乞大」と「乞塔惕」とは同じ語「Kitad」の異なる音訳法による表記と見なしうるものが了解されよう。

2. 『翻訳老乞大』の「doi」とは何か？

崔世珍『翻訳老乞大』において、「漢児学堂」の朝鮮語訳として「doi-hæg-dang」という語が見える。後半部は「学堂」の字音であるが、「doi」は何であろうか。中国語原文の「漢児」は北方中国において漢語を話す人々を指すから、「漢児学堂」とは要するに、漢語漢文を習う学校である。では朝鮮語「doi」もその「漢児」を指すのかと言えば、どうもそうではないらしい。

同じく崔世珍の編になる『訓蒙字会』(1527)には、「夷/doi-'i」「戎/doi-ziung」「蛮/doi-man」「狄/doi-dieg」「羌/doi-gang」「虜/doi-ro」などの語が見える。これによれば、「doi」は特定の民族を指すものではなく、異民族を総称する形態素のようである。つまり、『翻訳老乞大』における「doi-hæg-dang」は、異民族の言語に関する学校、簡単に言えば「外国語学校」を意味するように思われる。

これに関連するかと疑われるのが『事林広記』「蒙古訳語」の「～歹」である。以下のよう

達達：蒙古歹 (=Mongγo[l]dai)

回回：撒里答歹 (=Salidadai?)

女直：主十歹 (=Jusidai)

漢児：札忽歹 (=Jaqu[d]dai)

蛮子：囊家歹 (=Nanggiadai)

民族名にのみ「～歹」が見えることから、「歹(dai)」は「民族」を表わす形態素と仮定できる。『翻訳老乞大』の朝鮮語「doi」とよく似た意味と音形を持っていることになる。両者が仮に関連あるものとするならば、当時のモンゴル語に存在した「民族」を意味する/doi/ないし/dai/が、朝鮮語に借用語として入り、「doi-hæg-dang」などに用いられた可能性も考えられる。

「～歹」は後の明代の対訳語彙には一切見えず、「doi-hæg-dang」もまた『老乞大諺解』など後の改訂本では他の表現に変えられていることを付記しておく。